

2. 北部九州におけるいわゆる「赤焼土器」について

前節では、いわゆる「赤焼土器」についての研究史を紹介し、問題点をとりあげて整理し、さらに、当窯跡出土資料を加えて概念規定を試みた。ここでは北部九州における出土品のうち、今まで、いわゆる「赤焼土器」と言わされてきたもの、またその範疇と考えられるものをとりあげて、前述の分類にそって検討してみる。

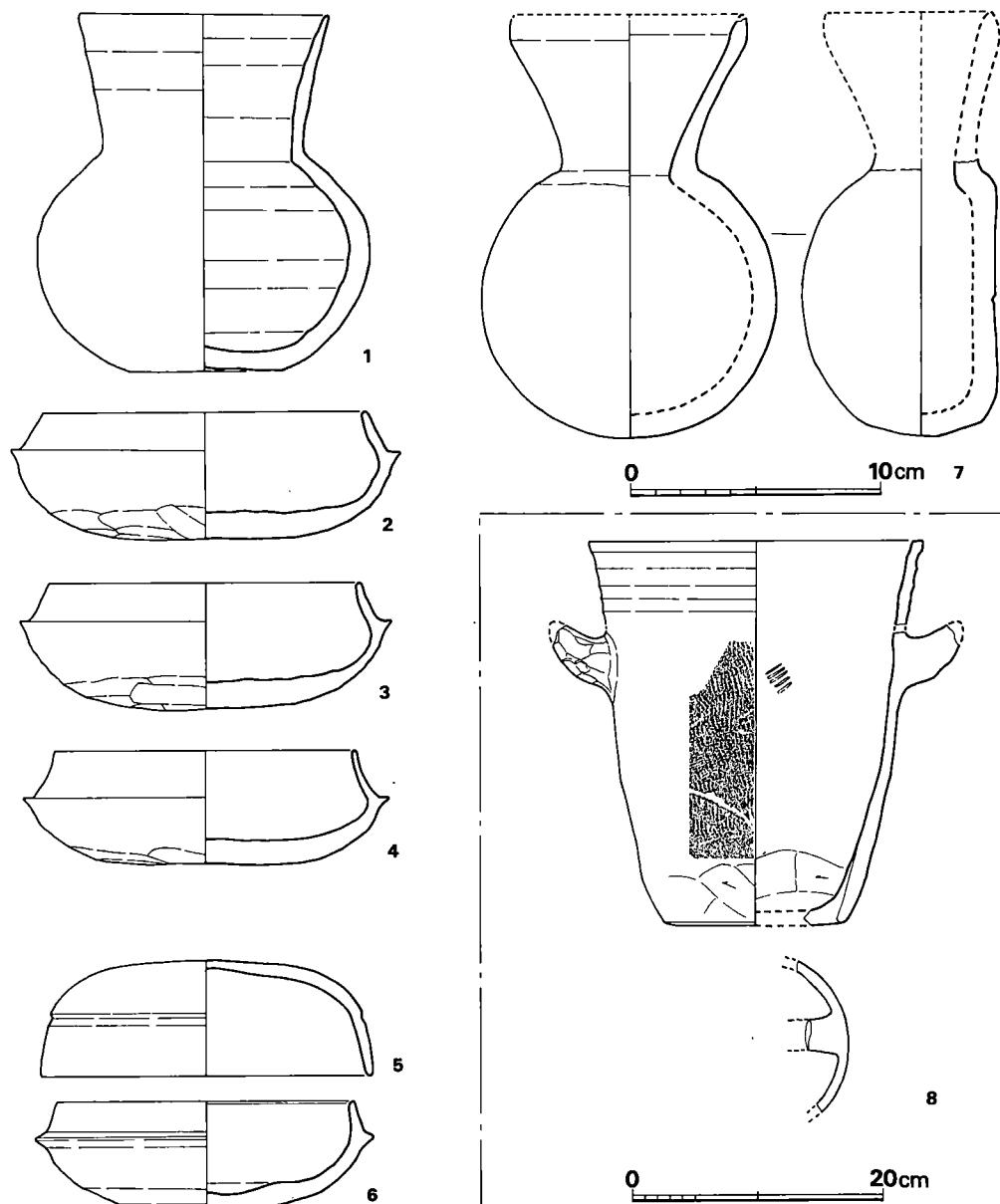
1) 似非土師須恵器

当該窯跡出土品にかなりみられる。例えば第35図93、第21図96、塚田2号墳周溝出土の甕、甌等がこれに該当する。これらの土器は形態は土師器そのもので、土師器と言ってよいが、調整法は須恵器の技法を用いている。93は把手付壺で、胴部外面は平行叩き上をカキ目調整し、内面は同心円叩き上をナデ調整する。胎土には砂粒を多く含む。焼成は硬質であり、茶褐色を呈する。96は甕で、胴部外面は平行叩き上を刷毛目調整し、内面は弧状叩きを施す。一部に黒斑がみられる。胎土には砂粒を多く含む。焼成硬質であり、色調は茶褐色を呈する。いづれも窯およびその周辺の焼成品である。塚田2号墳周溝出土甕は胴部外面に平行叩きを施し、内面は同心円叩きを施す。胎土は良好である。焼成は硬質であり、色調は茶褐色を呈する。甌は胴部外面を平行叩きし、カキ目を施す。内面は同心円叩きを施しており、底部近くはヘラ削りを施す。胎土には砂粒を多量に含む。焼成はやや軟質で、色調は茶褐色を呈する。第40図8の甌は二丈町赤岸1号住居跡出土品であり、胴部外面は平行叩き、内面は若干弧状叩きが遺存する。底部近くは内外面とも手持ちヘラ削りを施す。胎土には砂粒が多く、焼成は硬質であり色調は明茶褐色を呈する。甌は当該窯跡からも4個体出土しており、いづれもこれに該当するが、塚田2号墳出土品と異なり、焼成は灰陶であり須恵器そのものである。小田富士雄氏は天觀寺山窯跡群出土須恵器甌について『同形態の甌は一般に土師器製のものが多く、須恵器製のものは珍らしいので土師器のそれを写したことは疑いなかろう』と論述している。

2) 擬土師須恵器

第37図の甕がこれに該当すると思われる。1・2は塚田3号墳周溝出土品で6世紀中葉に比

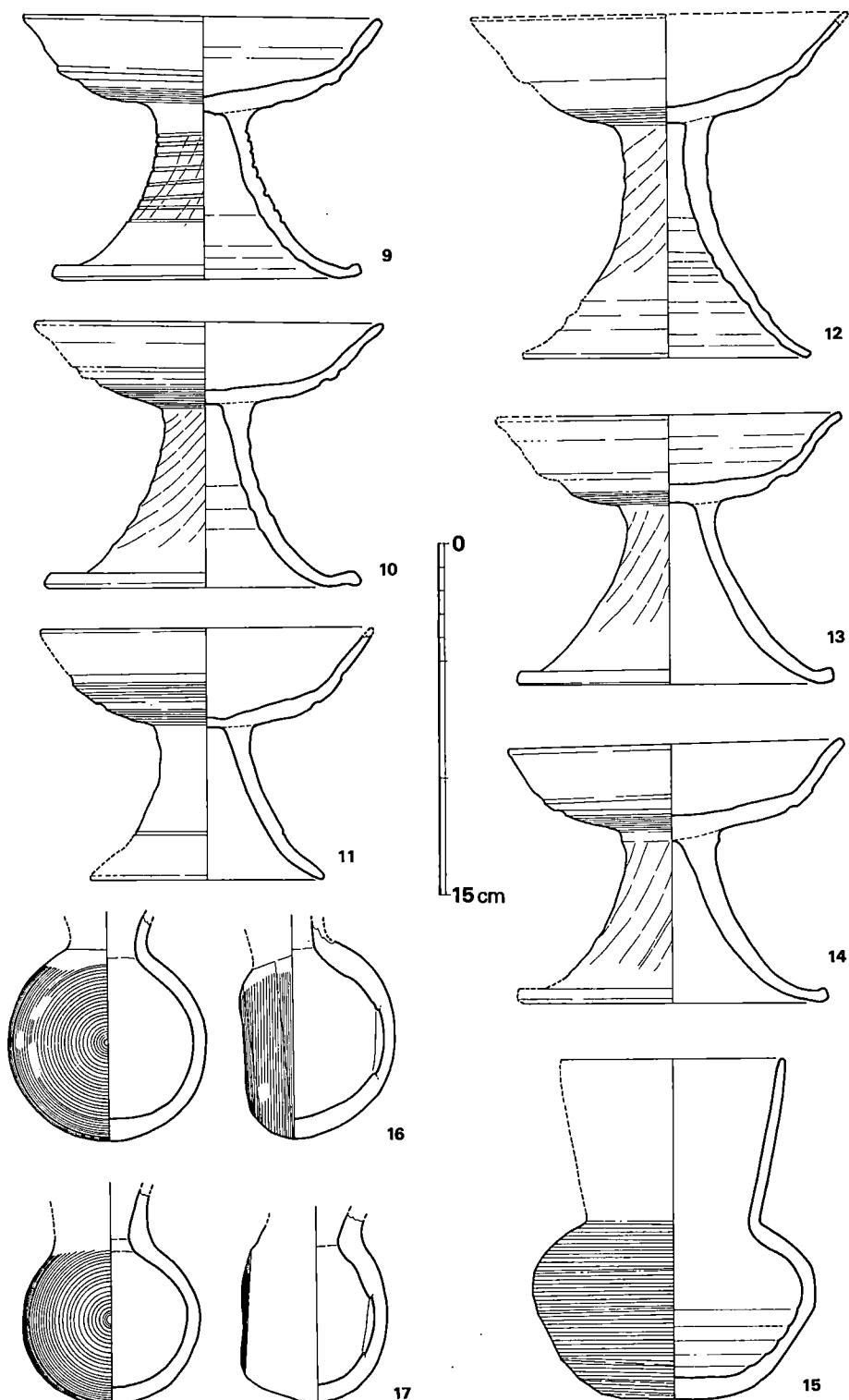
定される資料である。1は胴部外面中位には格子目叩きがみられ、以外の内外面は横ナデ調整を施している。焼成は硬質であり、茶褐色を呈する。2は胴部中位に2条の沈線を配しており内外面とも強い横ナデで棱を残している。焼成は硬質であり、色調は赤褐色を呈する。3は塚田遺跡V字溝出土品であり、胴部外部の下半部に格子目状の叩きを残す。胴上部はカキ目調整である。胴部内面は粗い刷毛目を施している。4・5は塚田遺跡黒色土層出土品であり、5の胴部外面の上位はカキ目調整し、内面は同心円叩きを施している。



第40図 いわゆる「赤焼土器」集成1 (縮尺1/3・1/6) 1~4. 寿命王塚古墳 5・6. 野黒坂遺跡
7. 奴山33号墳 8. 赤岸遺跡

3) 似非須恵土師器

福岡市高崎2号墳出土の有蓋把手脚付椀（第38図3・4），有蓋脚付壺（第38図5・6），桂川町寿命王塚古墳出土の直口壺（第40図1），杯身（第40図2～4），筑紫野市野黒坂34号住居跡出土杯蓋（第40図5），3号住居跡出土杯身（第40図6），田川市狐ヶ迫横穴群出土の提瓶（第41図16・17），直口壺（第41図15）がこれに該当しよう。第38図3・4の椀は体部中ほどに2条の沈線を配し，脚裾部から口縁端部にいたるまでカキ目調整し，内面は横ナデを施す。蓋3は頂部にボタン状のつまみがつき，つまみ周辺の頂部には刺突文を施す。以下の部分はカキ目調整し，口縁部と内面は横ナデ調整である。脚裾部近くの外面は若干段を有し，通常の須恵器とも異なる。胎土は精選されていて良好であり，土師器通有のものと酷似する。焼成はやや軟質であり，色調は明茶褐色を呈する。5・6は壺であり，胴部上面には2ヶ所に1条ずつの沈線を配し，直上部分に刺突文を配する。脚部の中ほどよりやや下位に4と同様の段がつき，この段を境として上面の口縁端部まで目の粗いカキ目を施しており，このカキ目手法は同古墳出土須恵器のカキ目が細いのに対し，異なっている。内面体部上位は横ナデ，下位はナデ，脚部は横ナデ調整である。蓋は頂部を凹窓させたボタン状のつまみがつき，つまみ周辺部には3列に刺突文を施す。以外の部分は横ナデ調整である。胎土は土師器通有の精良なものである。焼成はやや軟質であり，色調は明茶褐色を呈する。41図16は狐ヶ迫横穴群出土品であり，黒斑がみられる事から野焼き等の焼成法を考えたものである。16・17の提瓶は体部外面はカキ目調整し，口頸部は横ナデを施すという須恵器の調整法であるが，器壁が厚く，須恵器通有のシャープさに欠ける。焼成は硬質であり，色調は茶色ないし，茶褐色を呈する。胎土は精良である。40図1～4は寿命王塚古墳出土の直口壺，杯身であり，この資料が，いわゆる「赤焼き」土器の問題提起を行ったものである。2～4の杯身は同時期の須恵器杯身が立ち上り端部内面に段をなす特徴は模倣しきっておらず，また立ち上りと基部にかけての形態はシャープさに欠ける点で須恵器と異なる。底部外面は須恵器では回転ヘラ削りが通有であるのに対し，3個体とも手持ちヘラ削りを施している。以外の部分は横ナデを施している。胎土は精良であり，須恵器の胎土に比してほとんど砂を含まない。40図5・6は野黒坂遺跡出土の蓋杯である。6の杯身は須恵器杯身に似せてつくるが，細部，特に立ち上り部において須恵器と異なり稚拙である。底部外面は回転ヘラ削りという須恵器の調整法である。内面はヘラ磨きを施す。胎土は精良である。焼成は硬質であり，色調は茶褐色を呈する。外面に黒斑がみられる。40図7は奴山33号墳出土の提瓶である。当該報告書では蓋杯も「赤焼き」土器に含めていたが，これらは須恵器の焼成不良品と思えるため，ここではとりあげなかった。提瓶は須恵器の提瓶と比して成形は雑で，器壁が厚くシャープさに欠ける。焼成は軟質であり，色調は淡茶色を呈する。



第 41 図 いわゆる「赤焼土器」集成 2 (縮尺1/3)
狐ヶ迫横穴群

4) 擬須恵土師器

田川市狐ヶ迫出土高杯（第41図9～14），高崎2号墳出土高杯（第39図5），平瓶（第39図6）がこれに該当する。高杯9～14は高崎2号墳出土の高杯5と同じく脚部の形態は土師器的である。焼成は硬質であり，色調は明褐色ないし褐色を呈する。39図の高杯の脚部は，中央部と下部に沈線を配してカキ目を施す。脚柱内面は須恵器高杯，廻等にみられるしぶり痕がみられる。しかし，杯部中ほどに段を有して外反する様は土師器的である。杯部底面はカキ目調整する。焼成は硬質であり，色調は黄褐色を呈する。39図6の平瓶は須恵器とは異なる形態のものである。体部下半はヘラ削りし，上半部はカキ目調整を施す。焼成は硬質であり，黄褐色を呈する。

なお，野黒坂遺跡出土の蓋杯（第39図1～4）は，はっきり土師器と認識できるものが多いがこの部類にも含められよう。

以上分類にしたがって，北部九州出土のいわゆる「赤焼き」土器とよばれるものを検討してきたが，1の似非土師須恵器と2の擬土師須恵器は須恵器工人によって，登り窯またはその周辺で焼成されたものと考えられる。土師器の形態をまねた土器，もしくは，土師器に似せてつくるが，結果的には土師器とも通常の須恵器とも異なる形態をもつ土器を窯内で還元焰焼成すれば硬質灰陶須恵器となり，還元焰焼成が不十分，もしくは意識的に酸化焰焼成すれば，硬質赤焼き（時には軟質赤焼）須恵器となる。なお焚口近くで焼成した大形品については時には黒斑を生じることもある。野間窯跡でも須恵器工人が土錘，餌などの特殊品を登り窯で焼成している事実は，土師器の形態をまねて，須恵器工人が登り窯により土師的形態もしくはどちらともつかない形態の須恵器を生産することも肯首できよう。しかるに，土師器形態の須恵器を当該窯跡で焼成している事例は一般的須恵器工人集団が片手間程度に生産したと理解できよう。逆に，3の似非須恵土師器と4の擬須恵土師器は，形態のベースに須恵器があるが，須恵器そのものではなく，むしろ土師器というべきものであり，焼成は硬質，もしくは軟質である。調整は須恵器の形態を取り入れたのと同様の意味で，手法をまねており，カキ目，回転ヘラ削りを併用するが，このことは土師器集団にも回転台的な道具を用いれば十分可能と思われる。したがって，3・4分類の土器は土師器の工人集団の手になる須恵器的な形態の土師器であるといえる。

以上のごとき資料は整理の過程で随所で目についた。たとえば山門郡瀬高町名木野古墳群出土品，鞍手郡宮田町高平古墳群出土品の中に，3・4に相当するものが存在したが，今回は割愛した。